



TITLE:

一追放學者の觀たるナチスの經濟理論

AUTHOR(S):

中川, 與之助

CITATION:

中川, 與之助. 一追放學者の觀たるナチスの經濟理論. 經濟論叢 1938, 46(2): 318-323

ISSUE DATE:

1938-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131055>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第 二 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年二月一日發行

論 叢

歐米に於ける日本學研究に就いて……………經濟學博士 本庄榮治郎
支那農業の片影……………法學博士 財部靜治
銀行機構に於ける通貨の創作……………經濟學博士 小島昌太郎
統計教育論……………經濟學博士 蜷川虎三

時 論

昭和十三年度の増稅……………經濟學博士 汐見三郎

講 演

新興化學工業……………工學博士 喜多源逸

研 究

生命保險事業に於ける投資の特性……………經濟學士 西藤雅夫
企業結合と外部節約……………經濟學士 田 杉 競

說 苑

一追放學者の觀たるナチスの經濟理論……………經濟學士 中川與之助
ヴァイナーの國際貿易論研究……………經濟學士 松井 清
リカアドウの爲替論と購買力平價說……………經濟學士 有井 治
リーフマンの問屋制度論……………經濟學士 堀江英一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

說苑

一追放學者の觀たる

ナチスの經濟理論

中川與之助

茲に一追放學者とは前ハイデルベルヒ及び柏林大學の經濟學の教授たりしエミール・レーデラー(E. Lederer)を指す。彼は社會民主主義を奉じてゐたのでナチス革命により獨逸を逐はれ一時瑞西に亡命したとも報ぜられたが、今は紐育にある社會調査學校の政治・社會科の科長を勤めてゐる。以下述べるのは彼の論文「國民社會主義の經濟的理論」*の綱要である。ナチスの經濟理論及び政策を批判したものであるが、吾人にとりて參考となる點尠しとせぬ。敢て紹介する所以である。

一

レーデラーの批判は理論と政策との二つに分れてゐるが、この二者の關係に就ての彼の結論を先に述べる。ナチスにありては個人主義的經濟學は最早舊しと

して棄てられたが、之に代るべきものが未だ現はれてゐない。今日ナチスの政策は客觀的な理論に基いて樹てられてゐるのでなくして、指導者の意志や希望によりて動かされてゐるわけであるが、かゝる指導者の意志や希望がそのまゝに事實となつて現はるゝ如く考ふるは空想である。理論的根據なき政策は危険極りなきものであるといふにある。今左に彼の所論を少しく、敷衍しやう。

從來の經濟學は生産や分配の體系を述べるが、抑もこの生産や分配は市場機構を通じて行はるゝものである。又この市場機構は價格を基として成立つものである。この價格は需要供給の法則の支配をうけ、需要供給は一に個人的利害の打算からあらはれて来る。かくの如く考へ來れば經濟現象の基礎をなすものは個人的利益 (Individual Interest) に外ならぬ。而して又個人的利益を外にして經濟的理論も考へられぬのである。然るに個人主義を排撃して全體主義を高調するナチスにありては當然の結論として、個人主義的經濟行動や

* "The Economic Doctrine of National Socialism" (The Annuals of American Academy of Political and Social Science, May, 1937)

經濟原理が否定されねばならぬ。現にナチス獨逸に於ては利己的な活動や自由は抑へられ、階級闘争は斷壓せられ、國家權力は全體の利益の名の下に、生産や分配や價格にも強力なる統制を加へつゝあるのである。かゝる事實に即して考へると此の國に於ては最早個人的利害といふことが經濟の原動力をなしてゐないで、國家權力が經濟を左右してゐるのである。ナチスの理論には經濟人 (Economic man) の假定も許されず、

從來の如き價值論や分配論も妥當せぬ。又かの個人的な努力と結果との計量も不可能となるとせば、一體經濟問題の判斷の規準は何によるのか分らなくなる。ナチスにありては經濟學が獨自の學的領域を失つて、再び哲學や政治からの未分化時代に復ることゝなつてしまつた。經濟學が獨自の學的領域を失つてその體系が成り立たなくなるとすれば、經濟政策も、亦成り立たぬ。國民經濟の運営が指導者に委せられ國民は徒らに之に服従するの外なくなる。然もその指導者にも一定の經濟理論がないのであるから、結局は哲學や政治の

理論から經濟を指導することになるであらうが、このことは極めて大なる危險性を包藏するものである。指導者はプロパカンダと權力とによりて所期の目的を實現しうる様に考へてゐるが、かくの如きは經濟的奇蹟を信ずるものである。更に又レーデラーは個人主義社會にありては個人の利益や自由が第一義的地位を占めてゐたが、全體主義社會にありては國民の自己實現といふことが最高の目的となり個人は國家や全體の手段となつてしまふ。茲にもナチス經濟理論の基礎に大なる難問があるといふ。

二

次に轉じて、レーデラーのナチス經濟政策觀に及ぼす。茲ではナチスの軍備擴張政策をかれらの經濟的自給自足 (Autarchy) 及び通貨政策から論じてゐる。彼はオートキー政策を愚策となしてゐる。ヒットラーは且つて獨逸の地理的事情よりみて原料が不足してゐるので、オートキーは不可能なりとなしたが、ナチス黨内の急進論者は民族主義・國家主義の立場から、總て

の人は自國の農業によりて生きてゆかねばならぬ」

「獨逸人は獨逸人のパンで生きねばならぬ」 (“The

German people must live on German Bread”) と云

ことを高調してゐるが、これは國際的分業の利益を無視するものである。ナチスは或る商品は他國で如何なる價格で賣られやうかは問題でなく自國の生産物に衣食すべしといふが、それでは高價なる原料をも使用せざるをえなくなり物價も上り、財政も膨張してゆくの外なくなるであらう。況んやそれが軍備の擴張といふが如き巨大なる需要に就ては經濟的危險の程が察せられる。ナチス獨逸に於ける軍備の擴張は外交政策と密接の關係をもつ。而してこの外交政策こそ、今の獨逸の中心政策をなすものである。ヴァルサイユ條約の破棄・全世界に於ける獨逸民族の統制・舊植民地の回復・中歐ブロックの結成、さては赤色ロシアの征服等のプログラムを觀ても之は瞭である。而して軍備の擴張はこれらの外交政策を實現するための前提として國民的努力が之に注がれてゐるのであるが、軍備の擴張は財

政の膨張となり、經濟負擔の増大となりてゆくのであり、結局莫大なる公債を起さざるをえなくなるであらう。況んやそれが前述のオータキー政策と結ぶ時、愈々その危険を大にする。然るに之が對策に就てはナチスの陣營に二つの意見が存する。一はかゝる政策はインフレーションに導く危險性大なるが故に之を一定の限界に止むべしとなす合理論であり、他は國家目的達成のためのかゝる政費の膨張は敢て怖るゝに足らずとなす擴張論である。而して今のナチス黨内ではこの擴張論が寧ろ優勢である。前者即ち合理論は經費の膨張は例之それが國民的目的のためであり、軍備の擴張の爲であつても物價や通貨に影響を及ぼすことは必然であるから、その經費の従つて又公債の高さにも自ら一定の限度があるとなすのであるが、後者即ち擴張論者は、かゝる説を以て消極的なりとなす。即ち國家が國家目的達成のために經費を多く支出するにしても、使用されたる經費が新なる仕事を創り、その仕事が又次の新なる仕事を産み出し、従つて新なる購買力が、そ

れに伴うてあらはるゝが故に合理論者の如く、直ちにインフレーションを惹起するものに非ず、況んや軍備充實によりて國力が強化され、國家の經濟的實力も亦發展してゆくとせば、國民經濟上の生産能力も高まり國家に對する信用も大となつてゆくが政に何等憂ふに足らぬとなすのである。レーデラーはこの擴張論者の説を以て單純な、且つロマンチツクなものといつてゐる。彼がかくいふ所以はナチスの論者はいろ／＼の政策を行はんとしてゐるが、その政策の行はるゝ地盤たる經濟機構は依然として自由主義・個人主義のそれを承繼してゐるのである。即ち私的資本の活動や勞働市場が依然として存し、價格は生産費を償ふことを要し企業家は銀行に手頼らねばならないのである。かゝる經濟機構の上ではそこに行はるゝ政策が、その機構に相應しい結果をあらはしてくるのは當然のことである。政策が機構とは別個な結果を生み出すであらうとなす所が單純なロマンチツクな考へ方であるといふのである。レーデラーの考へによれば、ナチスの陣營に

色々な議論が現はるゝにしても結局は合理論者の説に耳を藉さなくをえぬであらう。さて然らば、合理論者の説に耳を藉すとしてナチス政策は如何なる結果を生むであらうか？。

先づナチス政策は極力インフレーションの抑止にむけられるであらう。而してその手段としては(イ)先づ賃銀を引き下げ私的消費を節約せしめ、消費財の價格の騰貴を抑へるであらう。而してこれのみにて不充分なる場合には(ロ)市場管理によりて需要を減少せしめて價格の統制をはかるであらう。更に(ハ)自由資本例之私的利潤や貯蓄の私的企業への投資を制限して公債にむけしむるであらう。(ニ)租税の課徴を厳しくしてその收入を大ならしめ公債の發行高を極力少くせんとするであらう。(ホ)自發的獻金を奨めるであらう。然しこれらの手段は勞働を安く使用して社會大衆の生活を壓迫するのみならず、私的資本を公的管理や使用に多くむけしむるによりて國民的資本のより有利なる活動を妨ぐる結果となる。このナチス政策は米國が景氣

回復のために財政事業を旺んにした政策とは反對に、却つて景氣回復を抑へる政策 (A policy against recovery) となる。これ程迄の犠牲を拂つて軍備を擴張し、その結果植民地を獲得し、資源をそこに求めうるとしても、それまでに拂はるゝ犠牲や經費を考へると始めから原料を輸入した方が利益である。況んやかゝる軍備擴張が他國の競争を促すによりてかゝる大なる犠牲や經費が果して報いらるゝか否かも疑問であるに於てをやといふ。

三

之を要するにレーデラーに據ればナチスの新政策は公債増發によるの外なく、それはインフレーションに導く傾向が大なるのみならず、國民生活に於ける國家の統制を益々擴大強化してゆくであらうとみてゐる。彼が國內に於けるかゝる自由の喪失を、國際的に國家のうる自由が果して償ひうるかは、一に將來の國際情勢に俟つの外ないが頗る疑問であるといふ。最後に彼はナチスの政策とロシアのそれとを比較して、何れも

國家的統制を行つてゐるが、ロシアが自然的富源に恵まれてゐること、ロシアの經濟政策が生産の發展を中心に置き且つその産業が既に革命の時期を經過したとなし、ナチス獨逸では富源に乏しいこと、並びにその新産業政策が今漸くその緒について今はその轉換期にある事などをあげて、ナチス獨逸のロシアに比して不利なる點をあげてゐる。

四

今の獨逸は文化の轉換期である。そしてレーデラーのいふ如く舊き經濟理論は棄てられつゝあるが、之に代る新しきものが未だ確立せられてゐない。従つて彼の指摘する如くナチス經濟政策に理論上の矛盾の多きことや危險性の大ききことも否定するをえない。乍併レーデラーはナチスの經濟理論が從來の個人主義的原理を全然否定するものゝ如くいふのは誤つてゐる。今までの所を觀るとナチスは依然として自由主義的經濟組織を繼承し、それを國家的・全體的立場から運営しやうとして多くの統制や指導を加へつゝあるのであつ

て、個人主義的原理を全然排除してゐるのではない。このことは經濟的自己責任の原則が高調せられてゐるをみても瞭である。^{*}従つて經濟理論も根本的には自由主義的理論に立つてゐるとみるべきである。然し統制が加はれば加はる程自由の領域が縮少せしめられてゆくことはやむをえない。國家的統制の下にしかも個人をして最大の能力を發揮せしめんとする所に困難なる問題が横つてゐる。ナチスはそれを教育や宣傳や權力等によりて遂行しつゝあるはレーダーのいふ如くである。ナチスによりて國民經濟と國家權力との關係が旺んに研究されつゝあるが、これは從來の個人主義的經濟學の閑却してゐた領域であるだけに、經濟學の理論に新しき展開が試みられるであらうと思ふ。か様なわけで、今のナチスでは從來そのまゝの個人主義的經濟理論がすてられつゝあるが、さりとて全然理論なしに政策を行つてゐるとか或はナチスの立場からは新しき經濟理論が生まれさうもないとみることは、恰も從來の經濟理論が完全に經濟現象を説明してゐたものゝ

如く信ずると同様に誤りであらうと思はれる。右の如くナチスの經濟理論は根本に於て自由主義的なものをすてないのであるから、その政策も亦之に即應せねばならぬ。レーダーのいふ如くインフレーションを招くが如き程度の財政膨張は當然阻止せられねばならぬ而してそれを阻止する手段はレーダーの指摘する如くであり、それは國民の懷を引き締めはするが之をゆるめることを許さぬ。それは非社會的でありといはるゝがナチスは將來伸びるために一時縮むのであるといふ。ナチス政策が黨内の急進論者に引きづられて無理に軍備を擴張し、インフレーションを惹き起すであらうと論ずることは、黨内の事情に疎き吾人には判斷しかねるが、ナチスの經濟統制が隅々にまで及んでゐる状態からみて、その統制力に餘程の變化のない限りみす／＼インフレーションを招くとは信ぜられない。然しレーダーの指摘する所は何れも核心的問題であるこれらが如何に解決されてゆくかは吾人にとりて興味ある問題である。(二・二・二八)

^{*} 拙稿、ナチス主義と經濟的自己責任の原則(經濟論叢第四十六卷第一號)參照